

デフレ対策がもたらす異常な金融情勢と必要な経済政策の見直し

中京大学 水谷 研治

1 経済水準は右肩下がりへ転換

短期的には上下を繰り返しているものの、過去の傾向から考えれば景気水準は著しく低い。極端なデフレ経済が続いていると見られている。それだけにデフレから脱却しようとして血眼になっているわけである。

ところが現状でも景気振興策や外部要因によって経済水準は異常にかさ上げされているのである。異常な事態がなくなれば、経済水準は大きく低下するであろう。今後、少子高齢化が進むため、その面でも日本経済は縮小の傾向をたどると考えられる。

2 極端な資金余剰

現実にデフレが続いているうえに、将来に対する明るい展望が開けないところから、企業は投資に慎重である。投資計画を自己資金の範囲にとどめたいと考える企業が多い。そのために資金需要が極端に低迷している。

一方で膨大な資金が供給されている。貿易収支を中心とする膨大な黒字分だけ海外から資金が入ってくる。民間部門へは政府部門から財政の赤字分だけ莫大な資金が毎年流入する。そのうえ景気を少しでも良くしようとして中央銀行が大量の資金を供給している。

その結果として、資金は極端に過剰となっている。

3 異常な金融市場

極端な金余りによって金融市場は異常な事態となっている。

金利が著しく低くなっており、短期金融市場では金利がほとんど零である。長期金融市場でも 10 年もの国債の金利が 1%をはるかに下回っている。すなわち債券価格は異常に高くなっている。それとの関連で各種の証券も著しく買い進まれており、ドル相場も実勢以上に高くなっていると考えられる。

このような現象が経済の情勢に好ましい影響を及ぼしている。ところが、このような状況が長年にわたって続いているために、現状が異常に良くて、やがては正常化して経済水準が低下するとの見方が少ない。そして、さらに無理を重ねて景気を押し上げようとすら考えられている。

4 経済政策の見直し

目先の景気を重視すると、長期的に重大な課題を抱え込むことになりがちである。景気を良くするために国の借金を増やすのがその典型である。膨大な国債の残高が将来の国民に大きな負担を強いることになる。

現在の我々がどれほど豊かで恵まれているかを認識する必要がある。恵まれた状況にあるだけに、どれほどの犠牲を払っても、我々が積み上げてきた国の借金を減らし、将来に備えなければならない。そして長期的な経済の発展と繁栄を目指すべきである。